読売福祉文化賞

寄り添う実践 誰もが笑顔に

第19回 受賞6団体

新しい時代にふさわしい福祉活動を実践している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。19回目を迎える今年は、一般部門で難病の子どもたちとその家族を小児科医が付き添って東京旅行に招待してきた「ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO」（東京都品川区）など3団体、高齢者福祉部門で引きこもりがちな高齢の聴覚障害者が交流出来る作業所を運営してきた「ろう高齢者の豊かな生活を支える会 陽だまり」（北九州市八幡東区）など3団体が選ばれた。10日にオンライン上で表彰式が行われ、受賞団体には活動資金として100万円が贈られる。福祉の向上に取り組む各団体の活動を紹介する。

【一般部門】

公益社団法人 ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO（東京都品川区）

難病児に東京旅行提供

「寒くない、大丈夫」。テーマパークへ向かう車両に車いすで乗り込む女の子に医師が優しく声をかけた。付き添いの家族もほほえみながら見守った。

難病と闘う3～18歳の子どもと家族に東京エリアへの旅行を無料でプレゼントしている。交通機関や宿泊施設、同行する医師の手配も行う。個々に病状や希望が異なり、人工呼吸器をつけるなどの医療的配慮も必要なため、旅はオーダーメイドだ。2007年に活動を始め、これまでに全国から計約450人を招待した。宿泊施設の提供やボランティアの派遣といった支援も広がりつつある。

「学校へ行きたい」「友達と遊びたい」という望みをかなえられない難病児もいる。家族は24時間の介護で心身の負担が大きい。「旅行や新しい経験が生きる希望となり、楽しい思い出につながれば」と、理事の阪井裕一医師(66)は力を込める。参加者からは「初めて家族そろって飛行機に乗った。医師がいて安心だった」「みんなで笑って楽しい時間を過ごせた」といった声が寄せられる。

コロナ禍で延期されていた旅行が再開された。阪井さんは「受賞を機に社会全体で温かなサポートが広がれば」と話している。（社会部・神園真由美）

車いすの女の子に声をかける阪井さん（7日、千葉県浦安市で）

NPO法人 NPOホットライン信州（長野県松本市）

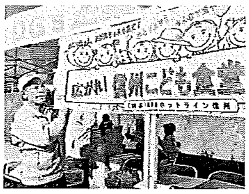
困窮相談、こども食堂も

生活困窮者らを対象とする365日24時間の無料電話相談は、この10年で3万2000件を受理した。面談同行支援は3800件に上る。ボランティアが対応し、食品を提供するなどして自立支援に取り組む。

相談活動は、リーマン・ショック後の不況で、生活に困った人たちの支援活動をしていた代表理事の村上晃さん(64)、専務理事の青木正照さん(72)らを中心に2011年に開始。東日本大震災で長野県にも身を寄せた被災者から生活相談を受けるようになったことが契機だ。

16年にはこども食堂の運営も始めた。支援を目的に組織した「信州こども食堂ネットワーク」に登録する活動拠点は県内115か所に増え、参加者は延べ9万人を超えた。家庭や企業から集まった食品や生活用品を必要な人に届けるなどの活動を展開する。

村上さんは「受賞は活動に携わるみんなの努力の結晶」と喜ぶ。最近、3人の息子を1人で育ててきた母親から「お金がかかりすぎて、死にそうになった時、助けてもらい、感謝しています」とのLINEを受けたという青木さんは「こども食堂を通じて支援を行う県内拠点を370か所に増やしたい」と意欲を語る。（長野支局・新井勝）



食品配布会の準備をする青木さん（長野県生坂村で）

日本卓球バレー連盟（京都市）

皆で楽しめる競技普及

ユニバーサルスポーツ「卓球バレー」を全国に広めようと、2008年に設立された。長谷川尚三理事長(61)は、「年齢や障害の有無に関係なく誰もが楽しめるスポーツ。普及の励みになる」と、受賞を喜ぶ。

卓球バレーは1974年、大阪の学校で筋ジストロフィーなど重度障害がある子どもたちのため考案された。卓球とバレーボールの要素を掛け合わせ、6人対6人で競う「ゴロ卓球」だ。

プレーヤーは、卓球台を囲むように着席して木の板を使い、ピンポン球をサーブし、ネット下をくぐらせる。相手チームは3打以内で返球しなければならない。球には金属球4個が入っていて弾まないため、体の不自由な人でも転がしやすいという。

長谷川さんは「互いが協力することが求められ、ゲームとしても面白いし、競技性も高い。多くの人に体験してほしい」と話す。

連盟には京都府や兵庫県など19府県が加盟。各地で体験講習会や競技会を実施し、全国障害者スポーツ大会のオープン競技としても親しまれていたが、2年近くコロナ禍で目立った活動ができていない。年が明けたら、徐々に大会や体験会などを再開したいという。（京都総局・山口景子）

木の板で打ち合う卓球バレーの試合（2020年撮影、日本卓球バレー連盟提供）

【高齢者福祉部門】

NPO法人 ソシオキュアアンドケアサポート（東京都大田区）

エステ通じ自尊心回復

高齢者施設や病院、在宅介護などで過ごす人に化粧やスキンケア、マッサージを施す活動をしている。闘病中や元気をなくした人たちに、医療や福祉の知識を生かしてエステティックの技術を施す「ソシオエステティック」で、自尊心を回復してもらうのが目的だ。

2010年から活動を始め、エステティシャンや介護福祉士ら全国に約45人の会員がいる。ゆっくり話を聞きながら化粧やマッサージをすると、険しかった表情が手鏡を見て笑顔になり、若い頃の思い出を語る高齢女性や、「夫には最期にきれいな自分を覚えていてほしかった」と喜んでくれる終末期の女性もいる。

理事長の光江弘恵さん(55)は「気持ちに寄り添いながらスキンシップを図ることで、『大切にされている』と感じ、自信の回復につながるようです」とほほえむ。自身も高校生の頃、闘病中の家族が「薄化粧もできず恥ずかしいから」と面会を断り、病院で最期を迎えた。「自分らしく生きるサポートがしたい」と力を込める。

最近は、母子生活支援施設での施術も行う。「病気に限らず日常を苦しいと感じる人もいる。受賞を機に、活動を少しでも知ってもらえれば」と意気込む。（社会部・神園真由美）

化粧した顔を鏡で見せる光江さん（右、ソシオキュアアンドケアサポート提供）

NPO法人 コーチズ（広島市）

運動で健康に 舞も工夫

健康寿命を延ばし、高齢になっても豊かに暮らし続けられる社会の実現を目指し、運動教室を開催するなど高齢者向けの健康支援活動を続けてきた。

2000年の設立当初は地域の子どもに対するスポーツ指導支援が中心だったが、地域住民らからのニーズを受け、02年から高齢者への健康支援をスタート。広島県内での教室の実施回数は今年3月時点で延べ約2万3000回、参加者数は延べ約43万人となり、活動の輪は県外にも広がっている。

11月27日の運動教室には、約50人の高齢者が参加。「ソーラン節」をゆっくりとした曲のテンポで座って踊れる振り付けに工夫した「座ソーラン」を舞った。認知症予防のため、指先の体操も行われた。参加者は「間違えても楽しい」と笑いながらプログラムを楽しんでいた。

昨年4月、父親から活動を引き継いだ児玉尚代表理事(37)は今回の受賞に対し、「父の代から約20年間やってきたことが評価されたのだと思う。喜びの気持ちでいっぱい」と笑顔を見せる。今後について、「高齢者が健康に楽しく過ごしてもらえるよう引き続き頑張りたい」と意気込んでいる。（広島総局・岡大賀）

「座ソーラン」を舞う教室参加者（広島市で）

NPO法人 ろう高齢者の豊かな生活を支える会 陽だまり（北九州市）

聴覚障害超え交流の場

聴覚に障害を持つ高齢者の引きこもりや孤立を防ごうと、気軽に集まれる場所として北九州市内に「陽だまり作業所」を設置。小物作りや料理など様々な催しを通じ、参加者同士のつながりを深める取り組みを行っている。

元々はヘルパー資格を取得した聴覚障害者が、不自由なくサービスを提供するための勉強の場として集まり始めたのがきっかけ。「毎日が寂しく、みんなで集まれる場所がほしい」との声が多く寄せられたことを受け、2003年に団体を設立し、交流の場として本格的な活動が始まった。

作業所には毎日約15人が集まり、洋服や小物入れを手作りしている。月に1回行われる交流会では、ゲームや料理、旅行なども行われ、参加者が親睦を深めている。毎日施設を利用するという70歳代女性は「みんなで集まって作業やおしゃべりができて楽しい」と笑顔を見せる。

京山敏子理事長(58)は「受賞を機に多くの人に活動を知ってもらい、聴覚障害者への理解を広げたい」と手話で語る。今後は地域の人たちや健常者との交流を図るため、手話の勉強会などの企画も検討している。（北九州総本部・田坂萌夏）

陽だまり作業所での小物作り（北九州市で）

【選考委員】

安藤雄太 東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー
栗原小巻 女優
袖井孝子 シニア社会学会会長
高木憲司 和洋女子大学准教授
馬場 清 日本福祉文化学会副会長
保高芳昭 読売新聞東京本社編集委員
（敬称略）

主催 読売新聞社
読売光と愛の事業団
後援 厚生労働省
日本福祉文化学会